

### 第三章 コチア植民地

鈴木貞次郎は8名の独身青年を伴い、サン・ジョゼ・リオ・パルドのある耕地（コーヒー園）に働くが条件が悪かったので1ヶ月で聖市に戻る。今度はサン・ジョアン・パラナイーバの農地に行き、玉ねぎ栽培は順調だが、一緒に入植した年長者と年少者との間に意見の相違が起き、それが感情的になり、そのため年少者の数名は作りかけた玉ねぎ畑と年長者を残し退く。この退出しようとしている青年達を、モイニョ・ヴェーリョの土地に入植させ、バタタ（薯）栽培を始めさせようと、そして間もなく数名の青年を伴ってモイニョ・ヴェーリョ (MOINHO VELHO) の土地に入植、それが1914年8月で、準備のため、先発隊として入植したのが栢野源造（カヤノ）、神原木平、難波実（第2回移民）、山田善十郎（岡山）、高嶽次平（山形）、原見瀬、など数名の内に鈴木末蔵（鈴木貞次郎実弟）。開墾仕事は独身者ばかりではうまく行かない。開墾には経験のある家族者を入植させねばと、その為グアタパラ耕地で副支配人をしている平野に相談に行き、同耕地で就労していた森田庫吉（高知県出身第2回移民）の家族を連れて帰って来た。それが1914年12月末で、グアタパラ耕地に置いて勧誘に応じたのは森田の外に細木龍馬、松岡政治、県島幸松（けんじま）の家族、ただ契約期間が終了してからとの条件つき、一方その頃青年達の中、難波、高嶽、原見、鈴木末蔵達は退き、残された栢野、神原達は心細くなるが森田外数家族が新に入植、大いに力を得た。いよいよ開墾に取り掛ろうと云う時に鈴木が去ることに成った。以後同植民地開発には関与していないが、鈴木こそコチア植民地の開祖である。

#### \*初期入植者

1914年(大正3年)8月鈴木貞次郎に伴われて栢野源蔵(岡山県人)、神原木平(岡山県人)、難波実(岡山県人)、原見瀬平(岡山県人)、高嶽次平、鈴木末蔵(山形県人)外数名。

1915年1月グアタパラ耕地より細木龍馬、細木梶馬、中村仁太郎、野村芳春、松岡茂一。

4月に松岡政治、松岡政八、県島幸松、中野時則。

5月に聖市より、山下亀一、本田宗五郎、出光弘、実松三郎、真里谷浩(第3回移民サンタ・オリンピア)、江口喜作。

8月、グアタパラ耕地より細木龍馬を頼って矢野柝治(ますじ)、溝淵広海、西村敏治、矢野正身、矢野正継、千頭正頼(ちがみ)、伊丹鶴吉、三本菊次郎、上村進、西村要馬(りきま)、西村房弥(高知、大2、妻元枝)とその息子の西村一喜が入植。

11月ピラジュー駅ボア・ビスタ耕地より、森田庫吉を頼って下元亮太郎、下元健吉、正木元、里見猛猪(たけい)、里見猛千代、別に上野尉平、高岡定(さどむ)、日下勝三(くさか)、1915年には30家族以上が入植するものであった。

1916年には、岡本左太郎、吉本寅八、岡専太郎(ピラシカーバより)。

1921年には、井上晴馬(井上ゼルヴァジオ忠志の厳父)、中島長作、吉良松之助(高知、大正2、妻モシオ)、吉良琢(うしま)、里見亀次、  
(「Cooperativismo que deu certo」24ページ、「コチア小学校の50年」)

サン・パウロ市内から入植者の出身県はまちまちだが、グアタパラ、ボア・ヴィスタ耕地からの入植者は、森田、細木の家族が高知県出身であった関係で殆ど高知県人である。

1916年11月19日コチア小学校創設コチア日本人会経営の小学校(未公認)。モイニョ・ヴェーリョ(コチア)植民地が開設されてから2年後、教師には植民地隣接地の農場を管理していた福川薩然(さつぜん)を迎えることが出来た。

1917年学校職員、福川氏5月15日ミナス方面に移転されるので退職。福川薩然(山口県、第4回移民)は真宗坊主で滝川、富岡等と同時にグアタパラ耕地に配耕。コチア小学校からミナスへ、そして平野植民地の旭小学校初代校長(1917～1918年7月)後年日本病院事務長を務める。

1916年10月23日コチア日本人会創立。

初代会長矢野耕治(グアタパラ耕地転出)同17～18年も矢野氏。

1919年2代目コチア日本人会々長千頭正頼(グアタパラ耕地より転出)、会員数32名、1920年同じく千頭会長。

1932年(昭和7年)従来本校はコチア日本人会の経営であったが、今回日本人会を解散して、新にノーバ。エスペランサ小学校父兄会を設立経営。1932年の保護者名に文野茂重第2回移民(平野植民地開拓において母、専が最初のマラリア犠牲者)を見つけることが出来る、高知県出身。

(コチア小学校 37ページ)

1934年校舎増築費収納表でも文野勝馬が記載されておる。また田所儀之助も見出すことができる。

(第2回移民、高知県グアタパラ耕地より転出)

最初の入植地300アルケールの土地には、新しい入植者を受け入れる余地が無く、これら新植民者達は隣接の休閑地を次々と借地して入植するものであった。

コチア植民地の最盛期と云われた、1927年～28年頃には約2百家族の集団地であったが、皆借地であった関係もあり年々転住する者が多くなり、第2次大戦が始まる1941年頃には、土地購入者10数家族と別に20数家族を残して殆ど転住する。

難波梅太郎(第2回移民岡山県人、グアタパラ耕地より転出)コチア街道薯作りの先陣で柏野源蔵と一緒に入植して間もなく、桂植民地に移転して火酒(ピンガ)醸造で儲けて大正時代に帰国、その後再渡伯。

(「ブラジル同胞活躍の姿」214ページ)

\*下元健郎 明治45年(1912年)1月25日下元亮太郎同ますの長男として高知県で生まれ大正3年(1914年5月12日両親に伴われて渡伯、1農年耕地に過ぎ、1915年11月コチア植民地に入植し成長。1936年(昭和11年)12月サン・パウロ法科大学卒業弁護士となり、カフェランジャ市に法律事務所開業。1956年フェラス・デ・アルメイダ弁護士の経営するサン・パウロ市内の法律事務所に入所し、これを兼ねながら、コチア産業組合顧問弁護士となる。1953年税務審議官の要職に就く。1956年1月20日日系初の州税務裁判所判事に任命される(「日系社会史年表」124ページ)在職中1968年4月29日病にて56歳で死亡。

\*田中ツタ、第1回移民笠戸丸でグアタバラ耕地に配耕された中で後年コチア植民地へ入植、鹿児島県川辺郡出身。笠戸丸での渡伯当時牧之段愛熊の妻として家族構成であったが、グアタバラ耕地配耕6ヶ月就労後家族解散聖市で家庭奉公数年。1913年サントスで田中十一と結婚、転じマト・グロッソ州カンポ・グランデ市に9年在住、聖市に戻る。1940年夫死亡後、コチア小学校付属寄宿舎炊事長として10数年勤務(移民50周年記念「かさ丸」124ページ)

後年の余生を憩の園で過ごす。(「ドナ・マルガリーダ渡辺」 前山隆編著)

1927年コチア組合結成創立組員氏名(グアタバラ耕地より転出者多くみうける)

1-村上誠基グアタバラ出、高知、大9年	43-三本菊次郎グアタバラ、サントイザヴェラ?高知大2
2-下元健吉ボアヴィスタ、高知、大11	44-松岡勝芳
3-県島幸松グアタバラ、高知、明45年	45-日下義造ボアヴィスタ、兵庫、大7、妻アサカ
4-松岡茂-グアタバラ、高知、大13年	46-高橋茂次
5-千頭公利グアタバラ、	47-山中信茂
6-馬場竜男福岡、大8、妻なみえ	48-田所健吉
7-松岡政治グアタバラ、高知、大2年	49-西村金馬
8-大利国太郎高知、大2年、妻ヤスエ	50-木下万次郎
9-矢野正継グアタバラ、高知、大2年	51-里見亀次高知、大2年、妻ミユキ、
10-江口喜作聖市、佐賀、明45、妻ハツ	52-藤沢春三
11-里見猛猪ボアヴィスタ、高知、大3年	53-大利勝吾高知、大2年、妻菊女
12-森田庫吉グアタバラ、高知、明43年	54-柏野源蔵先発隊、岡山、明治43年、妻トモエ
13-山下亀一聖市	55-室永又三郎山口、大7年、妻つま
14-高橋孫左衛門静岡、大11、妻ヨシノ	56-片山登、高知、明45年、妻ちよ
15-笠原晴夫	57-上野林次福岡、大2年、妻セキ
16-安井与三次郎	58-岡田徳次
17-加瀬川恵吉	59-中野時則グアタバラ、群馬
18-松村由造	60-吉田次郎秋田、大2年、妻ミマエ
19-中島長作	61-植田金之助
20-加藤保松	62-堀田美作
21-上村進グアタバラ	63-吉本亀高知、大2年、妻ツネ、
22-近藤渡	64-前田泰次
23-山中春吉	65-田所儀之助高知、明治43年、妻亀菊、
24-安藤喜代治	66-片田義喜
25-矢野耕治グアタバラ	67-奥田亮次郎
26-森鶴吉高知、大2、妻クマイ	68-井嵐藤作静岡、大10年、妻やす子、
27-溝渕秀馬グアタバラ、	69-中尾熊喜熊本、大3年、
28-北川正幹福岡、大2、妻照子	70-西村要馬グアタバラ、高知、明治45年、妻フサオ、
29-光谷孫一	71-西村利春グアタバラ、
30-松岡政八グアタバラ、高知、大2	72-宮崎吉平
31-野村芳春グアタバラ、高知、大3	73-弘田和三郎
32-真里谷浩サンタ・オリンピア福岡	74-吉本義清高知、大2年、妻政寿、
33-西村一喜グアタバラ、	75-山本友安
34-宮崎初次佐賀、大8年、妻タケ	76-明田市松広島、大10年、妻あい子、
35-里見猛千代	77-岡田正義
36-弘田馬次高知、大9、妻フミ	78-安村喜三郎
37-井上晴馬高知、大2、妻兼千代	79-石田則義
38-弘田道太郎	80-中尾文治郎
39-植田早苗ボアヴィスタ、	81-吉良留吉高知、大2年、妻エイマ
40-田中寿美恵愛知、大8年、妻静子	82-小西謹吾
41-中村仁太郎グアタバラ、高知、大3	83-田所島吉
42-菅木亘佐賀、大8年、妻ヨシエ	

\*コチア創立組合員筆頭者 村上誠基はコチア組合員番号ナンバー1で、その孫にあたる村上ヴィセンテ氏（サン・パウロ事業団職員、2006年2月現在）の説明には、祖父母誠基、チカエの渡伯最初の配耕先はグアタパラ耕地であり、コチア組合員番号No.1は創立者中、最年長者であったため組合員番号No.1を頂いたとのことである。村上憲宏 1919年聖市生、誠基長男、ジャガイモ栽培に従事、後イビウーナ移転、後年サン・ミゲールアルカンジョに移転 1965年現在。

有限責任コチア・パタタ生産者組合、4年後の1932年に組合法が出来、組合名は“コチア産業組合”と改称された。

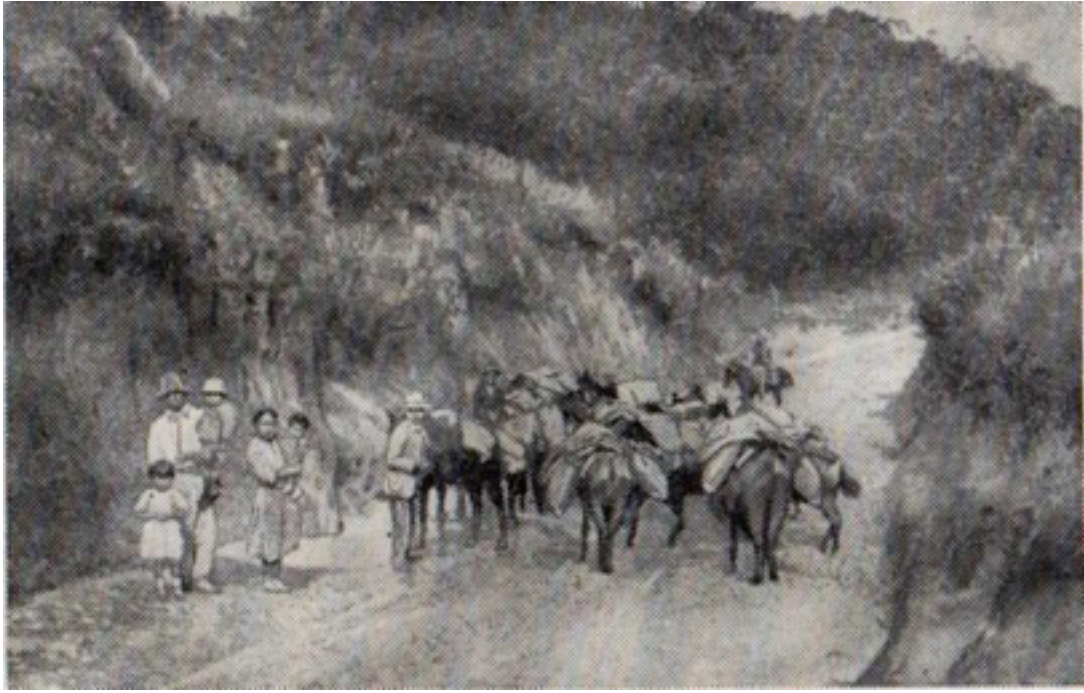
（付記）1966年グアタパラ移住地から戦後移民の鈴木辰雄氏、山形県新庄市鳥越、第30陣（渡伯65.3.11）がこの地に転住する。

高知県出身の第2回移民を祖父とする長井グアタパラジャタック研究員が2006年5月付けでセンター赴任。祖父母にあたる森田蔵吉、同小時、祖母の弟にあたる省憲（サダヨシ）等はコロノ契約終了後、コチア植民地へ入植。おじにあたる省憲氏は其の後家族と離れ、転々移転を繰り返しながらアルゼンチン方面へ移転したが、以後消息が途絶えたと聞かせるものであり、今でも実態は不明のままである。



コチア草分けの人々（左から森田庫吉、矢野柊治、栢源蔵氏等）  
（「コチア産業組合30年の歩み」より転載）

「コチア開植25年に際して」森田庫吉氏は周辺殆どが借地農であったが、又ジャガイモは連作では作柄が悪くなるので特に借地農であった。そんな中最初に農地を買い求めたのが草分けの森田庫吉氏である。それは「われ々は永久的なことは考えずに略奪農法をとったため、昔日の青田は見るかげもなく荒野となった。」このままでは植民地崩壊30年説を裏付けるものである。



生産物馬齢薯をラバの背につけて市場迄 20 数 km 運んだ 1915 年～ 28 年迄  
(「コチア産業組合 30 年の歩み」より転載)

25 年記念鑑より転載

コチア植民地総合計、家族数 164 戸、人員 910 男 505、女 405

所有面積 362 アルケ - レス

地価 741 コントス

地主 20 人

籾 50 俵

玉蜀黍 18.150 俵

ジャガイモ 77.710 俵

自動車「客」2 台同「貨」44 台

借地面積 523 アルケ - レス

借地料 106 コントス

野菜円 104 アルケ - レス

豚 874 頭、馬 310 頭、伯生 295、伯死 62

就学児童 144

入植出身都道府県 27 内、高知 61 戸、広島 14 戸、岡山、兵庫各 10 戸、佐賀 8 戸、長崎 7 戸、北海道 6 戸、福岡 6 戸、熊本 5 戸、静岡、徳島、和歌山各 4 戸、愛知、山口各 4 戸、愛媛、福島、新潟、福井、大阪、鹿児島、各 2 戸、秋田、茨城、東京、石川、三重、島根、大分各 1 戸

但しここでの収入はけた違いに高い。